

賀茂別雷神社

賀茂別雷神社は、一般的には上賀茂神社と呼ばれており、京都で最も古い神社の 1 つです。市の北東に位置し、賀茂別雷大神が地上に降り立ったと言われている神聖な神山の近くにあります。上賀茂神社の 1300 年以上にわたる歴史の中で、この神社は重要で影響力のある神社と見なされており、宮廷や有力な武士によって支援されてきました。この神社は、神々に供物や祈りを捧げる天皇陛下の使者「勅使」が定期的に訪れる、日本に 17 社しかない神社の 1 つです。ユネスコの世界遺産「古都京都の文化財（京都市・宇治市・大津市）」の一部として登録されており、2 つの国宝と 41 の重要文化財があります。

御祭神

上賀茂神社で祀られている主神は、自然の力を司ると信じられており、しばしば稲妻と雷に関連付けられる賀茂別雷大神です。厄除、雷除、その他の災害からの守護、不吉な方角からの不運からの守護、そして開運、必勝のご神徳があると言われています。また、賀茂別雷大神は、電気業界で働く人々の守護神と見なされています。

神社創建の神話

上賀茂神社の創始者である賀茂氏は、三足の鳥（八咫鳥）の姿になって日本の伝説的な初代天皇である神武天皇の案内を務めたことで最も有名な、賀茂建角身命という神様の子孫であると言われています。賀茂建角身命には、賀茂玉依比売命という娘がいました。ある日、彼女が鴨川で身を清めていると、朱色の矢が下流に流れてきました。不思議に思った賀茂玉依比売命は、その矢を家に持ち帰ってお祀りしました。その夜、彼女は矢の神聖な力によって妊娠し、やがて御子神という息子を産みました。この子が元服の年になると、賀茂建角身命がたくさんの神様を豪華な宴に招き、御子神へ客の中から父親を示すように頼みました。御子神はその代わりに、自分の父親は天にあると言い、それから雷鳴とともに天へ昇りました。

御子神の母親がもう一度会いたいと祈った後、御子神は彼女の夢に現れ、儀式の準備をするよう伝えました。それらは神聖な衣服、葵（野生の生姜）と桂の枝でできた飾り、そして馬が関わる儀式などです。御子神のお告げに従って準備が終わると、この神様は成人の姿で神山に降り立ち、賀茂別雷大神と名付けられました。これが上賀茂神社の由緒と考えられており、また京都で最も有名な祭りの一つである賀茂祭（葵祭りとしても知られる）の由緒であったと考えられています。

境内

上賀茂神社は、鴨川の東、神聖な神山からは南にあり、約 76 ヘクタールの敷地を持つ広大な神社です。境内は大きく 3 つの区域に分けられます。一の鳥居と二の鳥居の間、二の鳥居と楼門の間、そして本社の区域です。

一の鳥居をくぐると、参拝者は 2 つの野原の間にある白い砂利道を二の鳥居へ向かって歩き、途中でいくつかの大きなしだれ桜を通り過ぎます。ある特定の日には、野原の端にある小さな厩舎に上賀茂神社の神馬がいます。二の鳥居の向こうには、さまざまな社殿や、伝統的な日本庭園、そしていくつかの摂末社があります。楼門は、神職がお祈りや奉納を行う本殿（主な本殿）へ通じています。境内を流れるいくつかの小川は、ならの小川に合流し、その後、鴨川と合流します。

神山は上賀茂神社から 2 km 離れているにも関わらず、上賀茂神社にとって重要な場所とされています。その丸くて木々に覆われた姿は、社務所の横の小道から遠くに見ることができます。上賀茂神社の境内は、参拝者が神聖な山に面するように本社の区域が配置されています。

上賀茂神社の歴史

7 世紀～12 世紀：首都を守る神社

上賀茂神社の最初の社殿は 677 年に建設されました。桓武天皇（735～806）は 794 年に京都へ首都を移した後、上賀茂神社を参拝し、国の平和を祈願しました。北東は伝統的に不吉な方角と考えられていたため、上賀茂神社は首都を不幸から守る重要な神社と見なされていました。時が経つにつれ、上賀茂神社は影響力を得てゆき、公式に宮廷からの後援を受け続けました。平安時代（794～1185）には、上賀茂神社は国内で最高位の神社の 1 つになり、数人の天皇が賀茂別雷大神への敬意を示すため参拝しました。上賀茂神社は 1036 年に、式年遷宮という、21 年ごとに行うすべての神聖な建造物の儀式的な再建を始めました。9 世紀から 13 世紀にかけて、上賀茂神社の重要性は、特定の神社の儀式に参加する斎王という巫女として、未婚の皇女が特別に任命されるようになったことで、さらに強調されました。

12 世紀～19 世紀：強力な武家からの支援

12 世紀に武家が台頭してきた頃、有力な武将や大名が宮廷の代わりに上賀茂神社を支援しました。鎌倉幕府の初代将軍である源頼朝（1147～1199）は、不安定な時代にこの神社へ彼の庇護を与えました。日本の最初の偉大な統一者と見なされる織田信長（1534～1582）は、賀茂競馬の儀式のために馬を提供しました。信長の後継者の豊臣秀吉（1537～1598）は、高い費用のかかる式年遷宮の 1 つを後援しました。徳川幕府の初代将軍である徳川家康（1543～1616）は、関ヶ原の戦いを行った 1600 年に上賀茂神社へ参拝しました。その後に続く徳川将軍たちも、2 世紀以上にわたって上賀茂神社を支援し続けました。

19 世紀～現代：京都の代表的な神社

1867 年に最後の徳川将軍が正式に辞任した後、明治天皇（1852–1912）は、1868 年に上賀茂神社へ参拝し、神社の御祭神に日本の統治権が天皇に戻ったことを報告しました。その数年後、公式な神社の階級制度が改定され、上賀茂神社は政府が支援する最高位の神社の 1 つになりました。同じ頃、葵祭の大行列が復活しました。現代でも、上賀茂神社は京都で最も有名な神

社の 1 つであり、賀茂祭で主要な役割を果たしている勅使（天皇陛下の使者）の毎年の訪問を通じて、皇室から認められています。毎年、数え切れないほどたくさんの人々が上賀茂神社を訪れ、歴史的な建造物を鑑賞し、景色を眺め、神社の神様に敬意を表しています。

葵の紋

上賀茂神社の紋は、2 枚のハート型の葉と小さな花のつぼみを持つ植物を描いています。この植物は「葵」、より具体的には「二葉葵」（*Asarum caulescens* 野生のしょうがの一種）と呼ばれ、神社の創建の伝説では儀式の飾りの一つとして登場します。二葉葵の紋は、瓦や灯籠、飾り金具、絵馬、お守りなどに見られます。葵の植物自体は境内の、渉溪園の近くで丁寧に栽培されています。葵は賀茂祭にも見られ、この祭りの参加者は、伝統的に二葉葵の葉を桂の細い枝に巻き付けた飾りをつけています。

徳川幕府の時代（1610～1867 年）には、毎年春に、上賀茂神社の葵に関連する儀式が行われました。「葵使（葵の使者）」と呼ばれる使節が、上賀茂神社で葵を集めて江戸（現在の東京）へ運び、武運長久の祈願として将軍に献上しました。この儀式は、上賀茂神社の紋と徳川家の家紋の両方に葵の葉が描かれていることから始まりました。

陰陽思想の影響

上賀茂神社を創建した賀茂氏は、京都が首都になるずっと以前からこの地域に住んでいました。賀茂家の人々は長い間、上賀茂神社で高位の神職を務め、宮廷でも高官として務めていました。平安時代（794～1185）から、賀茂氏は陰陽道の熟練した術者として知られるようになりました。陰陽道は宮廷で、厄除や祓の儀式を行ったり、吉凶の方角を特定したり、また天文学や暦の日付、自然の観察によって未来を占うために使用されました。対照的で補完的な力の均衡に関する陰陽思想は、さまざまな方法で上賀茂神社の境内に表現されています。本社の区域にある狛犬と唐獅子という守護者や、細殿の前にある立砂という円錐型の砂、そして渉溪園にある陰陽石（陰陽の石）などがその例です。